

反障害通信

13. 1. 26

40号

原発の「三安神話」の崩壊

2011年原発震災により「原発の安全神話」が崩壊しました。昨年末のNHKで、NHKの解説員のひとたちが討論会のようなことをしていたのですが、その中で崩壊した神話はそれだけでなく、「安定供給」、「安価」ということも神話として崩壊したという話が出ていました。わたしはそれを「三安神話の崩壊」として押さえ直しています。ところが、論理的に破綻しているということが、まだ浸透せず、原発を巡る街のインタビューの中で、原発の三安神話は未だ生きているような発言が出ています。

そして財界からは盛んに、国際競争力のために安価な原発を動かせという圧力が出てきています。

原発設置・稼働の体制は税金でいろんなことを補って来たから安価だったので、それをまたぞろ、国民の負担にして（たとえば廃炉の費用を国でという自民党政府案が出ているようです）安価だと言いつのっているのです。国が出してきた原発に関する援助金と原発事故保障と核の廃棄物処理を電気事業者でやらせたらどうなるのでしょうか？決して安価ではないのです。それを国民負担の増税でやらないで、法人税増税でやるとどうなるか、財界のいっているのは、企業に負担をかけないで、収奪は国民から、しかも資本家ではなく、「中流以下」の国民からという発想なのです。かつて一億総中流幻想などあったのですが、今日格差拡大の中で、中流の貧困層への転落の時代に突入しようとしているのです。そもそも資本主義は目先の利益しか考えていないのです。それがまさに資本的経済の特質なのですが、国民に負担をかければ、そもそも消費が落ち込み、「経済成長戦略」など崩壊するのです。

未だに「経済成長戦略」という言葉が生きているようなのですが、資本主義経済の現段階、グローバルゼーションの外部の内部化が進み、もはやその進行が頭打ちになり、今度は内部の外部化として、非正規雇用の増大や差別主義・ファシズム的な流れが出てきている、そういうマクロな観点をもてないで、対処療法的政策としてアベノミクスなどを出しているのです。「経済成長戦略」というのはまさに「成長幻想」で、もはや、崩壊先延ばしでしかないのです。原発事故などによる世界崩壊になれば、崩壊先延ばしもない話なのです。

「安定供給」というのも、電力過多になっても一定期間動かし続けねばならず、定期点検で停止し、事故が起きたらどうなるのか、「安定供給」とは真逆の代物です。そもそも原発は電力の需要が増え続けていくことを前提にして作られてきたことです。経済成長の頭打ちやエコ節電などで、原発の増設など必要でなくなってきました。電力不足というこ

と自体が情報操作の中に出されていた、まさに神話的性格が明らかになってきています。原発の再稼働ということは電力会社の安全ということを犠牲にした経営の論理で策動されていることです。

神話を紡ぎ出してきたひとたちは今回の事故の責任をとることもなく、そして「経済成長」という別の幻想のなかに絡めとろうとしています。

いったい反省や責任のない政治はどうなっていくのでしょうか？

わたしたちが、ちゃんと反対の声をあげてこなかったという反省と責任の中で、このことを訴え続けていきたいと思っています。

『原発のコスト』という本があります。よくまとまっています。是非読んでください。

(み)

読書メモ

スピヴァクの本から崎山さんの本にいき、さらにもともとサバルタン概念をつきだしたクラムシまでいきました。グーハのサバルタン研究グループまで広げたいのですが、そこまでははととも、一応の打ち止めです。

サバルタン概念をpushしたまとめ論攷は次回巻頭言でやる予定です。

今回は本当に本が読めなくて四苦八苦していました。いろいろ読む本が増えてきて、読書計画を大幅に立て直さなくてははいけません。焦り放しですが、何とか立て直していきます。

たわしの読書メモ・・ブログ 218

・G.C. スピヴァク『ポストコロニアル理性批判—消え去りゆく現在の歴史のために』月曜社 2003

この本は2ヶ月かけて読みました。「私事」でばたついていたこともあったのですが、著者自身も持っている西洋的な知やインド的な知をそれなりに共有化しているという前提で書かれているし、訳註もついていないので、そのことを共有化していないわたしとしては、いつものように読み飛ばしていくのですが、あまりにもそのことが多くなると、意味がつかめなくなっていくます。わたし自身もそのような文を書いているのではないかと自己検証の必要を感じていました。極力そのことは意識化して、そのような文は書かない、語は使わない、それでも使わざるを得ないときは註をつけたりしてきたつもりですが、・・・。

さて、ブログ 208 でこの著者の『サバルタンは語るができるか』の読書メモを書いています。その冒頭で「著者はインド出身の女性で、アメリカのグリーンカード取得し、アメリカ在住というマージナリティを抱え込んだ立場で、西欧的な近代知の抑圧性を対象化しつつ、ポストコロニアニズムと性差別の交差するところで、脱構築的な論攷を進めようとしています。／著者はデリダの『グラマトロジーについて』の英訳者で、ポスト構造主義のフーコーやドゥールズの批判をしながら、デリダとマルクスをリンクさせようとし

ているようです。ポストコロニアリズムが＜帝国＞的グローバリゼーション批判とリンクしそうなので、とても、興味深く感じています。この本の題名のサバルタンは被差別者とか被抑圧者というような意味です(一般的訳としては「従属者」・・・今回追記)。そういう意味でも差別ということが重なるところでの論攷、わたしがとりあげている課題に重なっているのです。」と書きました。で、その読書メモの最後に「著者が課題としているところはわたしの問題意識とかなり重なっているのです、この著者の他の著作から押さえておきたいとこの著者の本や解説書を古本で注文しています。そのあたりを読んでもう一度この著に戻ろうかと思っています。」と書いた問題意識で、この著者の主著というべきこの本に辿り着いたのです。

前著のキーワードを「サバルタン」とすれば、この著にもその語はでてくるのですが、同じような意味の語として「ネイティヴ・インフォーマント」をキーワードとして使っています。この語の方が、この本のタイトルの「ポストコロニアル」の概念に直接性をもっていることとしてあるのですが、・・・

この本は、4章からなっています。1章「哲学」、2章「文学」、3章「歴史」、4章「文化」です。

全体的にこの著者は前記引用で出したように、「著者はデリダの『グラマトロジーについて』の英訳者」として、デリダにフェミニズムとポストコロニアルというところから切り込んでいくというところで、そのことにマルクス的なところも織り込んだ論攷を展開しています。

1章では、カント、ヘーゲル、マルクスをとりあげ、最後にポスト構造主義的なところにつなげています。

カントは啓蒙思想的なところでの知の抑圧性がコロニアル的なところとつながっていくこと。カントの中に脱構築的なことを読み込もうとしています。カントの美は不可知論的なところを補足するような展開になっているようです。

ヘーゲルの精神・意識の展開論がコロニアル的なところにつながっていくこと。この著ではヘーゲルのヒンズーとの対話を書いています。

マルクスはマルクスが突き出した「アジア的生産様式」への批判を展開しています。そもそもマルクスの単線型生産様式の展開論への自己批判的なとらえ方として突き出したアジア的ということは、批判しえたということ自体としては意味があるとしても、その「アジア的」ということ自体が脱構築される対象となっていることです。このことはわたしのこの間の論攷に引き寄せれば、フェミニズムにおけるジェンダー概念がそれまでの性差別を脱構築することとして突き出されつつ、むしろ性差自体を固定化してしまう中で、セックスと区別したジェンダー自体が桎梏になってきて、セックス概念を脱構築する必要性が出てきていること。障害においてもディスアビリティ概念を突き出した中で、インペアメント自体は歴然としてあるということにしまっていることを脱構築していく必要性が問われることと類比できます。

2章はスピヴァクの出発点は文学批評で、その文学でのポストコロニアルとフェミニズム的とらえ返しをしている本領発揮的論攷です。

3章は『サバルタンは語るができるか』の焼き直しの文です。ただ、前著では「(語

ることは)できない」と書いていたところを「できないことはない」というように転換しています。

4章は反差別的なところとして出てきているカルチャースターディーの文化批判の脈絡で、文化ということのもつ抑圧性を押さえようとしています。

あまりにも時間をかけてしまったので、全体的な流れがどこまでの確につかめているか、また各論攷もかなり強引や読みになっているかも知れません。スピヴァクはデリダとマルクスをつなぎ、またポストコロニアルとフェミニズムをつなぐ反差別論的に重要な論攷、もう一度読み直しの作業をしたいのですが、そもそもこの著を読み込むために、いろいろな文献を読み込んでいく必要があります、スピヴァク論としてそれ自体に打ち込んでいくことになりそうで、とてもそこまでやりきれません。つまみ食いの論攷にとどめます。

いつものように、後論のために備忘録的なメモを残しておきます。

111-112P 差別論として読み解く、ポリテック本源的蓄積論としての差別の問題

113P 陥入 差別の問題とマルクス主義

アジア的生産様式論批判

144P 「アジア的」は西洋的「文明」を脱構築する役割を担った

151P 396P 脱一物象化・・・マルクスー廣松とのつながり

270P ナショナリズム

293P 知の暴力

299P フロイトの術語

340-342P 歴史とは？

402P フーコー批判

448P 「サバルタンは語ることはできない」の取り消し

494P 発展段階図

555P 桎梏としての「文化」

573P 吃る

593P 退化した転換をとらえかえす

606P エスノフィロソフィーと脱構築の親近性

たわしの読書メモ・・・ブログ 219

・崎山政毅『サバルタンと歴史』青土社 2001

余談的な話から始めます。この本は図書館で廃棄処分になっていたものを入手しました。本屋さんで新刊本としてかなり売れている本をどうして廃棄処分にしたのか、謎なのですが。

この本は、このブログの一回前のスピヴァクの本よりも、サバルタン概念をより幅広くとらえ、そして哲学的にも掘り下げています。そして、中南米の国々のサバルタンの運動について、実践的な資料を提出してくれています。

いつものようにメモです。

グラムシのヘゲモニー論からサバルタン概念への架橋 P22-23

サバルタン概念の重層化 P32-33

実体主義—本質主義批判

エリートとの二分法（グーハ） P34

サバルタン性→ヘゲモニーの「外部」 P34—35

歴史性がとらえられない

サバルタン概念における実体主義批判 P40

関係概念としてのサバルタン P40

知におけるヘゲモニー P42

ポストコロニアリズムにおける植民地主義とスピヴァク P53

変成する転倒 P81

「サバルタン研究」の文体 P84

知の蓄積の両義性

《われわれ》の構成 P144

「沈黙の道程」 P176

「発展」という概念のとらえ返し P183-184

「肅正」問題 P226 P242

マルクスのきめつけと差別性 P254

西欧的主体による知的搾取 P281

多様で複数である声 P283

たわしの読書メモ・・ブログ 220

・アントニオ・グラムシ／松田博編訳『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』明石書店 2011（グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ）

この本は、グラムシの『獄中ノート』からサバルタン関係のノートを集めたものです。

スピヴァクを読んでいて、少なくともグラムシのサバルタン概念押さえておきたいと思っていたところ、本屋の店頭で見つけました。

グーハラのインドにおける「サバルタン研究」グループやスピヴァクのサバルタン概念はグラムシのサバルタン概念のポストコロニアリズムの援用なのです。

コロニアリズムでは植民者と被植民者との二分法になり、支配者—被支配者という二分法になるのですが、グラムシのサバルタン概念はヘゲモニー論での関係論的な展開になっています。

市民社会と政治の関係をとらえ返したところでのヘゲモニー論がイタリア共産党の構造改革論的革命論を生み出したようで、『獄中ノート』全体を押さえ直したところで、今一度サバルタン概念をとらえ返す必要があるのですが、そこまではやりきれないので、とりあえずいつものようにメモを残しておきます。

「現実的歴史形成過程」と「歴史像形成過程」の乖離 P8(※)

ヘゲモニー論

知とヘゲモニー P9

階級ではなくて集団 P33

根底にある分業

経済決定論批判

実体主義批判がある一複合的ヘゲモニー関係、ヘゲモニー装置の創出→そこから自律性

ホモ・ファーベラー労働観 P38

わたしメモ作成者からすると労働概念自体のとらえ返しの必要

コムーネ(自治都市または都市国家) P40

自治の法的な廃止 P44

近代国家の成立

サバルタン概念 P47

サバルタン論とアソシエーション論の連携 P49

国家論？ P55-56

構造改革

国家形成過程の歴史と周辺化される歴史 P65(※)

ユートピア(トーマス・モア) P71

受動的革命 P88

ヘゲモニーと改革 P90

感じること—知ること—理解すること P92

分裂は分業から P97

「国家・市民社会論」—「サバルタン論」との関係 P103

労働概念←仕事 P106

通底するサバルタン論(サバルタン—知識人ということで) 146P

国家—市民社会—アソシエーションとヘゲモニー—知識人—サバルタン P162

サバルタン研究における従属性と自律性の強調 P164

ヘゲモニー論とサバルタン論 P164

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 40 号」アップ(13/1/26)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリーを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされな
い方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

「親＝敵」論とは何だったのか？

「親は敵だー」というような言い方は、今はほとんど見られません、70年代の青い芝のひとたちを中心にして出されていたアジェーションのような語で、当時からして、論理性を尊重した人たちは、もっと注釈をつけて語っていたし、別のいいようも探していました。

このような突きだしめは、論理性が必要とされる学をやっているひとにもいます。上野千鶴子さんが「オトコは定年退職をすると産業廃棄物になる」というようなフレーズもそのようなことです。このひとは日本のフェミニズムの旗手と言われるようなひとで、旗手とかアジェーターとかは、誤解をうむことは承知で、心をぐっとつかむフレーズを生み出してきました。そもそも、「親は敵だー」という突き出しめ、そもそも当時その言葉をきいたひとが額面通り受け取っていたわけでもありません。インパクトを与えるために「乱暴な言い方」をしていると受け取りながら、自分で注釈をつけてとらえ返していたのだと思っています。

そして、何よりもそのような提起がなぜ出てきたのかというとらえ返しこそが重要なのです。

青い芝が新しい運動として動いていく以前は、「障害者運動」というとほとんど親や施設そして学者などの「関係者」が中心になって担うような活動でした。保護者的にあるところで代行主義が当然のようにあり、そのこととつながって親の「障害者」殺しが起きてきていること、そして青い芝が家庭に幽閉されるように過ごす「障害者」を外に連れ出す活動をしているときに立ちのびる親の存在もありました。「親は敵だ」ということばはそういうところから出てきていることをおさえねばなりません。新しい「障害者運動」は反差別、発達保障論批判とこの代行主義批判の三つの課題を掲げて登場してきたのです。

親＝敵論の批判をするのは主に親なのでしょうが、この代行主義批判ということの意味を押さえた上で、代行主義を自ら戒めるところで、その上でなす必要があると思います。

もうひとつは、今日的には、介助を家族が主に担っているケースの家族の介助がもつ抑圧性のあるのではと思っています。

わたしは介助ということが介護になってしまう（保護的になってしまう、主体性をうばってしまいがちになってしまう）ことを押さえ、そのことを超えていく関係をどうするかということを押さえて、きちんと新しい関係を生み出していないと、介助が持つ抑圧性に陥っていくのだと思うのです。そのすくなくとも介助の抑圧性への批判の一端として親＝敵論があることも押さえておく必要があるのだと思っています。

実はわたしは親の介助に入っているのですが、母が高齢で「子ども化」していく中で、家族介助の本人のことを思っての介助の抑圧性を感じています。睡眠時間が不規則になる、譫妄状態になることを避けようと、睡眠を家族がコントロールすること、その抑圧性の問題をどうとらえたらいいのか、そのことと子育てがもつ子どもへの抑圧性自体がつながっているのではと考えたりしています。

そのあたりのこと、介助労苦論あたりへの批判・対話を、介助日記のようなことで実践的な問い返しとしてみなしていきたくて考えています。

介助労苦論批判のために

(はじめに)

介助に関する本が何冊も出ていて、わたしもいくつか読んでいます。

でも、どうも介助は大変だということが基調になっています。

その「大変」さとは何かということを考えていました。

朝日新聞の夕刊の「ニッポン人脈記」の認知症を特集にした連載の中で（「認知症のわたし」シリーズ7）「必要なのは認知症の人と向き合う人手であり、入院ではない。北欧などの病院や施設を視察して、思いは確信に変わった。」とありました。

人手というのは単に数の問題だけでなく、当然質も問題になっているのですが。

わたしは今、高齢の母の介助のまっただ中において、確かに、わたしも大変さを感じている立場なのですが、その大変さを解きほぐし、そのことを超えていく、介助の態勢ということを考えていきたいと思っています。

介助は快助の側面もあるという思いももちつつ、ひよとしたら、「やっぱり大変さという結論しか出てこないよ」、ということになるのかもしれませんが。

とにかくかなり赤裸々な体験を連載していきます。

赤裸々となれば、母のプライバシーの侵害という問題も出てきます。ですが、ペンネームを使っていて、しかも、わたしの文が母の周りのひとに届かないということを逆手にとって、そして何よりもわたしの理論先行で実践がおいつかず、母と衝突してしまう、そのことを少しでも緩和していく自己検証という意味も込めての、文にしていきたいと思っています。

時局川柳 (6)

脱と言い 輸出は良いとエゴイズム

良心を売り飛ばして出世する

人命を危険にさらしてかねもうけ

ハコモノを麻薬漬けて作られる

三極は保守と右翼と極右だけ

維新言う誰かに似てる ヒットラー

差別され競争叫ぶ差別主義

競争が生み出すいじめと体罰を

自らの責任たなあげ追及す

この國の政治の迷走終止符を

(編集後記)

◆最低隔月が3ヶ月を超えてしまいました。さまざまなことが重なったのですが、新しい体勢に順応というか、パターン化で慣れてきているので、次回からはまた「隔月より短く」に戻したいと思っています。

◆原発震災から二年目になります。事故前にちゃんと取り組んでこなかった反省と、風化させるものかという意志を込めて、巻頭言を書きました。神話を崩壊させるのは論理的なのですが、論理や理論というものはなかなか浸透していかないという思いを強くしています。

◆本を読めなくなっていました。なんとかこれも戻していきます。

◆維新の会の橋下大阪市長の桜宮高校の「体罰」―自殺事件での無ちゅくちゃの言動に恐ろしさを感じています。『週刊朝日』の部落差別問題とからめて、次号で取り上げたいと思っています。

◆わたしが動けなくなっている一番の抱えている課題としての高齢の母の介助、むしろ否定的にとらえないで、理論先行になっているわたしの実践的な課題として、そこから理論的なことにさかのぼっていきたいと思っています。

反障害―反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>